

開催地名	北海道 羅臼町
開催日時	令和6年12月21日(土)14:00～15:30
開催場所	羅臼町民体育館「らうすぽ」
語り部	平澤 つぎ子(千葉県旭市)
参加者	町民 20人
開催経緯	根室管内で北海道防災総合訓練が実施されることに合わせ、防災に関する講演会の実施を検討した際に、本事業を活用することとなった。 講演内容については、実際に災害が発生した場合の避難所運営について、実体験をお話しいただき、地域防災力の向上に繋げることを目的とした。
内容	■はじめに 災害は単に恐れるべきものではなく、そこから学び、防災・減災対策へ活かしていく姿勢が求められる。千葉県旭市と北海道羅臼町は、海に面していることや高齢化率が高い点で共通しており、旭市の事例を参考にしながら、災害への備えについて考える。本講演では、過去の災害から得た教訓を踏まえ、具体的な備えと対応について述べる。 自然災害には、大雨や台風、雪害、火山噴火、地震、氾濫・洪水、高潮・津波、土砂災害などがあり、それぞれの特性を理解した上で、適切な対策を講じることが不可欠である。特に近年、異常気象による豪雨災害が全国各地で発生し、被害の規模も拡大している。こうした背景を踏まえ、各地域での防災意識向上と具体的な対応策の検討が求められている。 ■災害の種類について 土砂災害は、①土石流、②地滑り、③崖崩れの3種類に分類される。地域によっては「山津波」とも呼ばれることがあり、発生前の兆候を見逃さないことが極めて重要である。「まだ大丈夫」と判断して避難を遅らせることが、大きな被害につながる可能性があるため、早めの避難準備が鍵となる。土砂災害の発生速度やリスクは地域の地形や気象条件によって異なるため、各地域の特性に応じた防災対策が必要である。 土砂災害は時速20キロ程度で進行することが多いが、地形や降水量によってはさらに速くなることもある。災害の前兆を察知し、防災意識を高めることで被害を軽減することができる。例えば、①土石流は谷や斜面の土砂が急激に流れ出す現象で、山口県では大規模な被害をもたらした。②地滑りは斜面全体がゆっくりと移動する現象で、静岡県浜松市では住宅地に甚大な被害を及ぼした。③崖崩れは雨や地震の影響で斜面が崩落する現象で、広島県では多数の箇所が発生し、大規模な被害となった。 土砂災害の前兆としては、①視覚的(崖の割れ目の発生、小石の落下、川に流木が混ざるなど)、②聴覚的(地鳴りや木々の揺れる音など)、③嗅覚的(泥臭い匂いなど)が挙げられる。これらの異常を察知した際には、迅速に行動を起こすことが防災対応の基本である。特に「まだ大丈夫だろう」と思い込む正常性バイアスを克服することが、適切な避難行動を取る上での鍵となる。 台風や大雨などの気象災害については、事前に気象庁の予報や防災情報を活用することで、早めの対策を講じることが可能である。例えば、2024年8月22日の台風10号では、進路や線状降水帯の発生が警告されていた。北海道でも予想降水量が示され、こうした情報を適切に活用することで、早期避難の判断が可能となる。一方で、地震は事前に予報がなく、突然発生するため、日頃からの備えと防災意識の向上が不可欠である。 ■東日本大震災について 東日本大震災は観測史上最大級の地震であり、震度7を記録した地域が複数存在した。日本全土が揺れ、千葉県では最大震度5強を観測した。地震発生から30分後には第一波の津波が襲来し、消防車が横転するほどの勢いで押し寄せた。命の危険を顧みず出動した消防士が、津波に巻き込まれながらも泳いで車にしがみつき、一命を取り留めた事例は、防災活動における覚悟と責任の重要性を示していた。 津波はその後も繰り返し襲来し、最大7.6メートルに達した。多くの住民が避難を試みたが、一部の人々は自宅の様子を確認するために戻り、津波に巻き込まれるという悲劇が発生した。この事例からも、「津波は小さい」「遠くまで来ない」といった誤った認識がいかに危険であるか

がわかる。

■災害時の対応と教訓

地震発生時には、まず自身の身を守ることが最優先となる。避難経路の確保、火の始末、初期消火は揺れが収まった後に行い、状況が許さない場合には速やかに避難することが求められる。また、家を離れる際には、電気のブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めるなどの基本的な対策を徹底することが重要である。

過去の災害を振り返ると、自助・共助・公助の役割を明確にし、それぞれが適切に機能することが被害の軽減につながることを示されている。例えば、阪神・淡路大震災では家具の転倒による圧死が多発し、家具の固定や住環境の安全確保の重要性が浮き彫りとなった。

また、東日本大震災では、釜石市の小中学生の生存率が99.8%と非常に高い数値を記録した。この「釜石の奇跡」は、日頃の防災訓練の成果であり、中学生が小学生の手を引いて高台へ避難することで、多くの住民が救われた。この事例からも、日頃の備えと実践的な訓練がいかに重要であるかが明らかである。

■まとめ

防災・減災の取り組みには、知識と実践の両面が不可欠である。地域住民が情報を共有し、要支援者の把握を進めるとともに、避難経路の確認や防災マップの活用など、具体的な対策を講じることが求められる。また、災害時には「自助」が基本となり、隣人同士の助け合いによる「共助」がこれを補完し、最終的に行政の「公助」と連携することで、地域全体の防災力を向上させることができる。

日頃の防災訓練の積み重ねが、災害時の迅速な対応を可能にする。災害はいつ発生するかわからないが、常に備えておくことが重要である。各自が防災意識を持ち、自分たちの地域を自分たちで守る姿勢を大切にしながら、今後の防災活動に取り組む必要がある。



開催地より

羅臼町に起こりうる自然災害に対する種々の方法を、ご自身の経験に基づいて教えて頂いた。また、今回の講演を通して自助共助を高め、防災力の向上へ取り組んでいきたい。